

各関係機関の長 殿

鹿児島県病害虫防除所長

## 令和元年度病害虫発生予察特殊報第1号について

このことについて、下記のとおり発表したので送付します。

なお、病害虫防除所ホームページ ([www.jppn.ne.jp/kagoshima](http://www.jppn.ne.jp/kagoshima)) にも掲載しています。

## 病害虫発生予察 特殊報第1号

令和元年7月5日

鹿児島県病害虫防除所

1 病害虫名 ツマジロクサヨトウ (チョウ目, ヤガ科), *Spodoptera frugiperda*

2 寄主植物名 飼料用トウモロコシ

### 3 発生確認及び発生状況

2019年6月27日に南九州市の飼料用トウモロコシほ場で、ヨトウムシ類幼虫による食害が確認され、ツマジロクサヨトウの疑義があり、門司植物防疫所鹿児島支所に同定依頼した結果、7月3日に国内未発生 of ツマジロクサヨトウと確認された。

本虫の寄主範囲は広いとされているが、現在のところ、県内で被害を認めた作物は飼料用トウモロコシのみである。

本種は、南北アメリカ原産で、2016年にアフリカ大陸で発生が確認された後、2018年までにアフリカ中南部のほぼ全域に分布が拡大し、2018年にはインド、スリランカ、バングラディッシュ等の南アジア、2019年には中国でも発生が確認された。本種は寄主選考性の違いからトウモロコシ系統とイネ系統の報告がある。

### 4 形態及び生態等の特徴

#### (1) 分布

北米～南米、アフリカ (サハラ以南)、アジア (インド、中国、タイ、ミャンマー、台湾等)

#### (2) 寄主植物

アブラナ科 (カブ等)、イネ科 (トウモロコシ、イネ、サトウキビ等)、ウリ科 (キュウリ等)、キク科 (キク等)、ナス科 (トマト、ナス等)、ナデシコ科 (カーネーション)、ヒルガオ科 (サツマイモ等)、マメ科 (ダイズ等) などの広範囲な作物。

#### (3) 形態及び生態

ア 成虫は開張約37mm、雌雄で外観が大きく異なり、オスのみ前翅中央部に白斑を持つ (写真

1)。終齢幼虫は体長約40mmで頭部の逆Y字および尾部の斑点が特徴である (写真2, 3)。

卵は寄主植物に塊状に産み付けられ、メスの体毛で覆われる。

イ 本種は暖地に適応した種 (南北アメリカ大陸の熱帯～亜熱帯原産) であり、熱帯では年4～6世代発生する。南北アメリカでは毎年夏季に成虫が移動・分散するが、暖地を除く地域では越冬することはできない。

#### (4) 被害

ア 中米・ニカラグアの調査では、肥大期から成熟期のトウモロコシに55～100%で本種が加害した場合、収量が15～73%低下する報告がある。

イ 本虫は、幼虫が新葉の葉鞘部や若い子実を食害する。摂食量が多く、食害部には多量の糞が散在する (写真4, 5)

ウ 本県では、数%～50%程度の被害株率で、出穂前の飼料用トウモロコシ茎葉で食害が確認されている。

### 5 防除対策

(1) 多発すると、被害が拡大する恐れがあることから、ほ場をよく見回り幼虫の早期発見に努める。

(2) 発生ほ場においては、別に指定される薬剤の散布を行うか、薬剤散布が困難な場合は、早期刈取りによる青刈りサイレージまたはすき込み処理を実施する。

(3) 農薬の使用にあたっては、散布は無風又は風が弱い時に行うなど近隣に影響が少ない天候や時間帯を選び、風向、防除器具のノズルの向き等にも十分注意するとともに、隣接農作物の栽培者に対して散布予定農薬の種類や散布時期等を事前に連絡するなど、農薬の飛散 (ドリフト) に留意する。

(4) 幼虫の分散を防ぐため、収穫後は直ちに耕耘する。

※ 農林水産省によると、本虫は、これまで国内で発生しているヨトウムシ類と同様、的確な防除の実施により被害の軽減が可能であると考えられています。

## 6 参考文献等

(1) 農林水産省ホームページ，侵入を警戒する病害虫に関するファクトシート，

【病害虫の名称：ツマジロクサヨトウ】より

(2) 松村，大塚，吉松（2019）ツマジロクサヨトウの中国における分布拡大と日本への侵入警戒。  
植物防疫 73：434-438



写真1 ツマジロクサヨトウ成虫 左（♂） 右（♀）植物防疫所 HP より引用



写真2 幼虫の全景



写真3 幼虫（頭部，尾部拡大）



写真4 飼料用トウモロコシほ場での幼虫による被害状況



写真5 食害の様相（拡大）

# ツマジロクサヨトウに対しては 以下の農薬を使用して防除を行ってください。

## ○飼料用とうもろこし

農薬名	希釈倍率	使用方法	使用時期	散布量	回数
カルタップ水溶剤	1000 倍	散布	収穫 21 日前まで	100～300L/10a	2回以内
アセタミプリド水溶剤	6000 倍	散布	収穫 90 日前まで	100～300L/10a	3回以内
MEP 乳剤	2000 倍	散布	収穫 30 日前まで	100～300L/10a	2回以内

## ○未成熟とうもろこし

農薬名	希釈倍率	使用方法	使用時期	散布量	回数
エマメクチン安息香酸塩乳剤	1000 ～ 2000 倍	散布	収穫 3 日前まで	100～300L/10a	2回以内
BT 水和剤	2000 倍	散布	発生初期(但し、収穫前日まで)	100～300L/10a	
フルベンジアミド水和剤	2000 ～ 4000 倍	散布	収穫前日まで	100～300L/10a	2回以内
シペルメトリン乳剤	1000 倍	散布	収穫7日前まで	100～300L/10a	3回以内

## ○とうもろこし(子実)

農薬名	希釈倍率	使用方法	使用時期	散布量	回数
エマメクチン安息香酸塩乳剤	1000 ～ 2000 倍	散布	収穫 30 日前まで	100～300L/10a	2回以内
BT 水和剤	2000 倍	散布	発生初期(但し、収穫前日まで)	100～300L/10a	
フルベンジアミド水和剤	2000 ～ 4000 倍	散布	収穫前日まで	100～300L/10a	2回以内
シペルメトリン乳剤	1000 倍	散布	収穫7日前まで	100～300L/10a	3回以内

## ○サトウキビ

農薬名	希釈倍率	使用方法	使用時期	散布量	回数
クロラントラニプロロール・ジノテフラン水和剤	2000 倍	散布	収穫 45 日前まで	100～300L/10a	3回以内
クロラントラニプロロール水和剤	5000 倍	散布	収穫 30 日前まで	100～300L/10a	3回以内
フィプロニル粒剤		植溝処理土 壤混和	植付時	4～6kg/10a	1回
		株元処理土 壤混和	培土時	6kg/10a	1回

## ○水稻

農薬名	希釈倍率	使用方法	使用時期	散布量	回数
スピネトラム水和剤 (飼料用米に使用する場合を除く)	4000 ~ 6000 倍	散布	収穫 7 日前まで	60~150L/10a	3回以内 (播種時又は移植時1回、本田2回以内)
BT 水和剤	2000 ~ 4000 倍	散布	発生初期(但し、収穫前日まで)	60~150L/10a	
エトフェンプロックス粉剤		散布	収穫7日前まで	3~4kg/10a	3回以内
エトフェンプロックス乳剤	1000 倍	散布	収穫 14 日前まで	60~150L/10a	3回以内

## 稲(箱育苗)

農薬名	希釈倍率・量・使用方法	使用時期	回数
クロラントラニリプロール粒剤	育苗箱(30×60×3cm、使用土壌約5L)1箱あたり 50g・育苗箱の苗の上から均一に散布する。	は種時覆土前～移植当日	1回
フィプロニル粒剤	育苗箱(30×60×3cm、使用土壌約5L)1箱あたり 50g・育苗箱の苗の上から均一に散布する。	は種時覆土前～移植当日	1回
スピノサド粒剤	育苗箱(30×60×3cm、使用土壌約5L)1箱あたり 50g・育苗箱の苗の上から均一に散布する。	移植2日前～移植当日	1回

## ○さつまいも

農薬名	希釈倍率	使用方法	使用時期	散布量	回数
スピネトラム水和剤	2500 ~ 5000 倍	散布	収穫前日まで	100~300L/10a	2回以内
インドキサカルブ水和剤	2000 倍	散布	収穫7日前まで	100~300L/10a	2回以内
エトフェンプロックス乳剤	1000 倍	散布	収穫7日前まで	100~300L/10a	3回以内
フルベンジアミド水和剤	2000 ~ 6000 倍	散布	収穫前日まで	100~300L/10a	2回以内

上記農薬はツマジロクサヨトウに対して登録はありませんが、植物防疫法第 29 条第 1 項の規定による防除を行うために使用する農薬として、使用が可能です。

また、上記希釈倍率、使用方法、使用時期、散布量、回数を守ることで、出荷停止等、流通に支障が出ることもありません。

上記の作物以外で使用可能な農薬については、下記までお問い合わせください。

門司植物防疫所鹿児島支所  
電話 :099-222-1046  
FAX :099-225-3465

鹿児島県病害虫防除所  
電話 : 099-245-1157  
FAX : 099-245-1149